臺灣の歌審査員の作曲發表

本會は昨年五月五日の吉日を卜し、御大典記念事業の一として公募したる「臺灣の歌」を發表しましたところ大に世の歡迎を受け、爾來滿一ケ年各方面に廣く謠はれてゐることは誠に欣快に堪へません、其節審査員の作曲が十八點ありましたが之は當地にて審査することを差控へ東京音樂學校の各大家に依頼したのであります。然るに臺灣の歌は既に公開演奏を了り江湖に宣傳せられつゝある際、重ねて同一歌詞に對する曲譜を發表するは時宜を得たるものに非らずと云ふので、之が發表を一時差控へて置きましたが、今回右の中優秀なるもの三篇を撰び本誌に發表することに致しました。蕃山の唄と蓬萊小唄は赤尾寅吉氏の作曲で、南の島は一條慎三郎氏の作曲でありますが就中蕃山の唄は音樂學校の大家達が稱賛された所謂折紙付のものであることを御紹介して置きます。

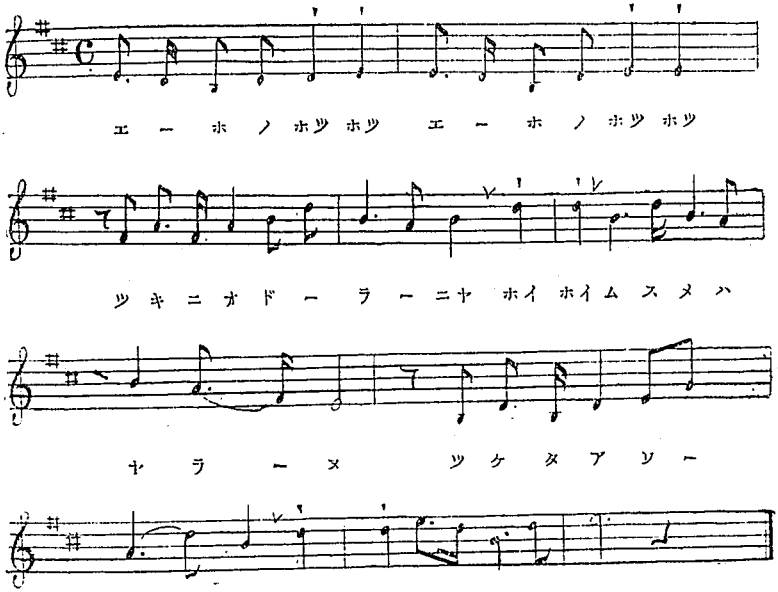
附記

民謠南の島の旋律は、どこかで聽いた樣なフシであるし、又さうでもない樣なところもある、といふ感じを與される方々が特に東海岸の方にあるかもしれません、これは花蓮港紅座社の蕃謠のフシですが、數年前某大官が、これはもうこのまゝで歌さへつけたら迚も面白い、と賞讃されたフシを、一旦すつかり自分の頭に入れ、更に變態（モディフアイ）して歌に合ふ樣に作つたものである事、尚無論ブチーニが越後獅子や宮さんのフシをブチーニファイドしたり、又はドヴオルザークが新世界交響曲の中にアメリカのニガーの民謠をモデイフアイドした樣な巧妙な事はなし得ませんが、とにかく紅座社の蕃謠を小生ファイドした積りである事を申添へて置きます。（一條生）

蕃山の唄

作詞 山口次郎
作曲 赤尾寅吉

♩=96



一

エーホノ ホツ ホツ
エーホノ ホツ ホツ
月に踊らにや ホイ〳〵 蕃婦はやらぬ
搗けた粟餅 ホイ〳〵 なほやらぬ

二

エーホノ ホツ ホツ
エーホノ ホツ ホツ
木船乗らなきや ホイ〳〵 小唄は聞けぬ
戀し杵の音 ホイ〳〵 なほ聞けぬ

三

エーホノ ホツ ホツ
エーホノ ホツ ホツ
桧伐らなきや ホイ〳〵 御殿は建たぬ
戀の木の香は ホイ〳〵 なほたたぬ

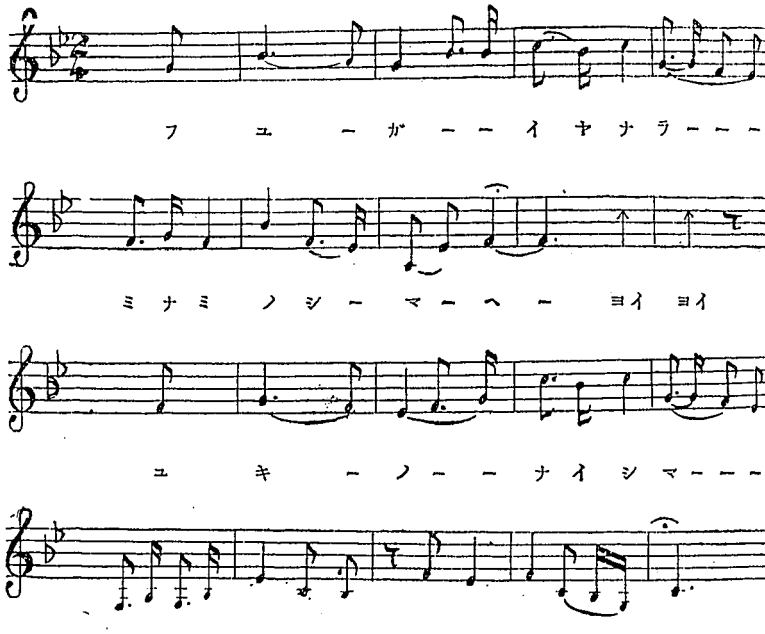
四

エーホノ ホツ ホツ
エーホノ ホツ ホツ
大魯閣行かなきや ホイ〳〵 タツキリ見えぬ
廣い大平洋は ホイ〳〵 なほ見えぬ

南の島

♩ = 104

作歌　上村一仁
作曲　一條憲三郎



一

冬がいやなら
南の島へ　ヨイヨイ
雪のない島
イヤホホ　ホライ
春の島

二

夢が見たけりや
南の島へ　ヨイヨイ
椰子の木かげで
イヤホホ　ホライ
戀のゆめ

三

笛が吹きたきや
南の島へ　ヨイヨイ
山に涼風
イヤホホ　ホライ
音もふるふ

四

樂がしたけりや
南の島へ　ヨイヨイ
牛の脊にのりや
イヤホホ　ホライ
日が暮れる

五

朝日がさきたきや
南の島へ　ヨイヨイ
紋のあはれに
イヤホホ　ホライ
涙さへ

六

月夜戀ふなら
南の島へ　ヨイヨイ
遠音ちやるめら
イヤホホ　ホライ
青い月

七

花を探ぐるなら
南の島へ　ヨイヨイ
年が年中
イヤホホ　ホライ
花の島

八

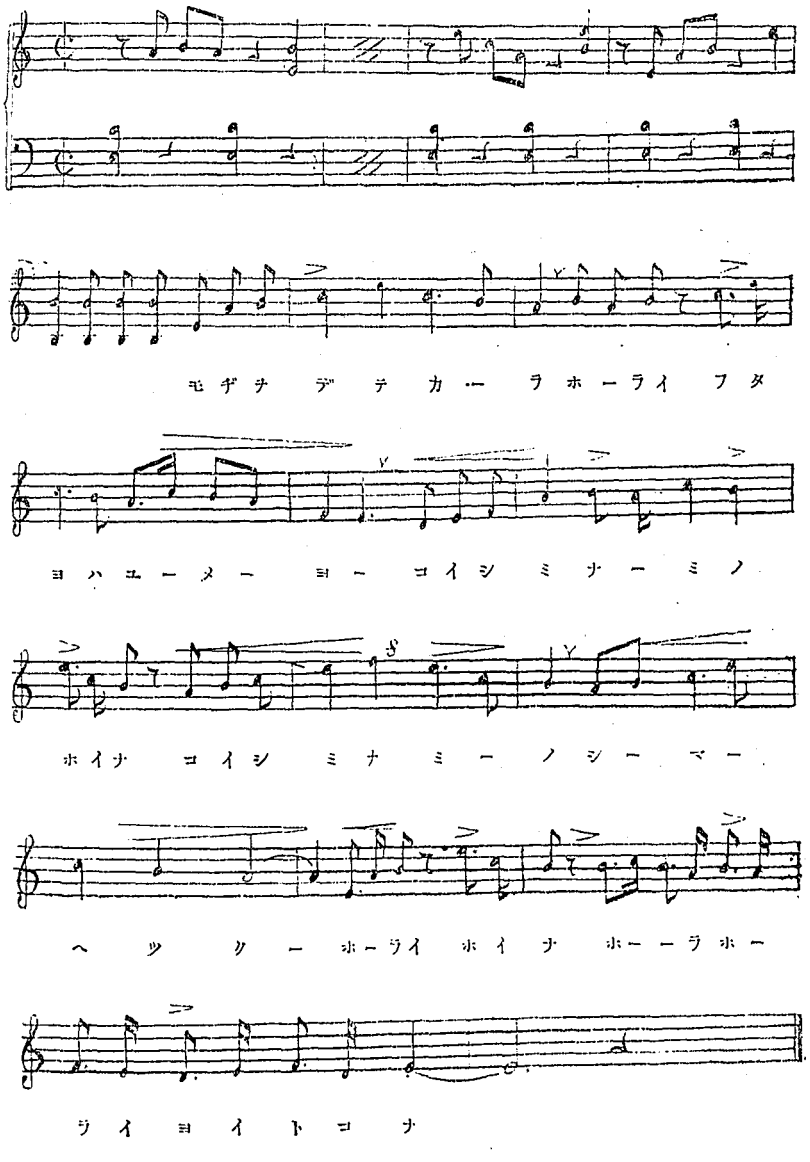
唄が好きなら
南の島へ　ヨイヨイ
島が唄だよ
イヤホホ　ホライ
唄はでも

蓬萊小唄

作歌 小松忠文
作曲 赤尾寅吉

♩= 96

優しき氣分にて



一

門司を出てから
二夜は夢よ
戀し南の　ホイナ　戀し南の
島へ着く
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ

二

冬も青葉の
風そよ〳〵と
夢の島かや　ホイナ　夢の
島かや離れ島
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ

三

眞帆よ片帆よ
海風うけて
島の港へ　ホイナ　島の港
へ戻る船
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ

四

君と南へ
北回歸線
月は新高　ホイナ　月は新
高山の上
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ

五

椰子の葉蔭に
風さら〳〵と
島のをとめの　ホイナ　島
のをとめの洗ひ髪
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ

六

島の南よ
南のはてよ
あれは鷲鼻　ホイナ　あ
れは鷲鼻灯がちらり
ホーライ　ホイナ　ホーラ　ホライ
ヨイトコナ